

庫文造改
龍六十四第 部二第

集謠民秋白曲作

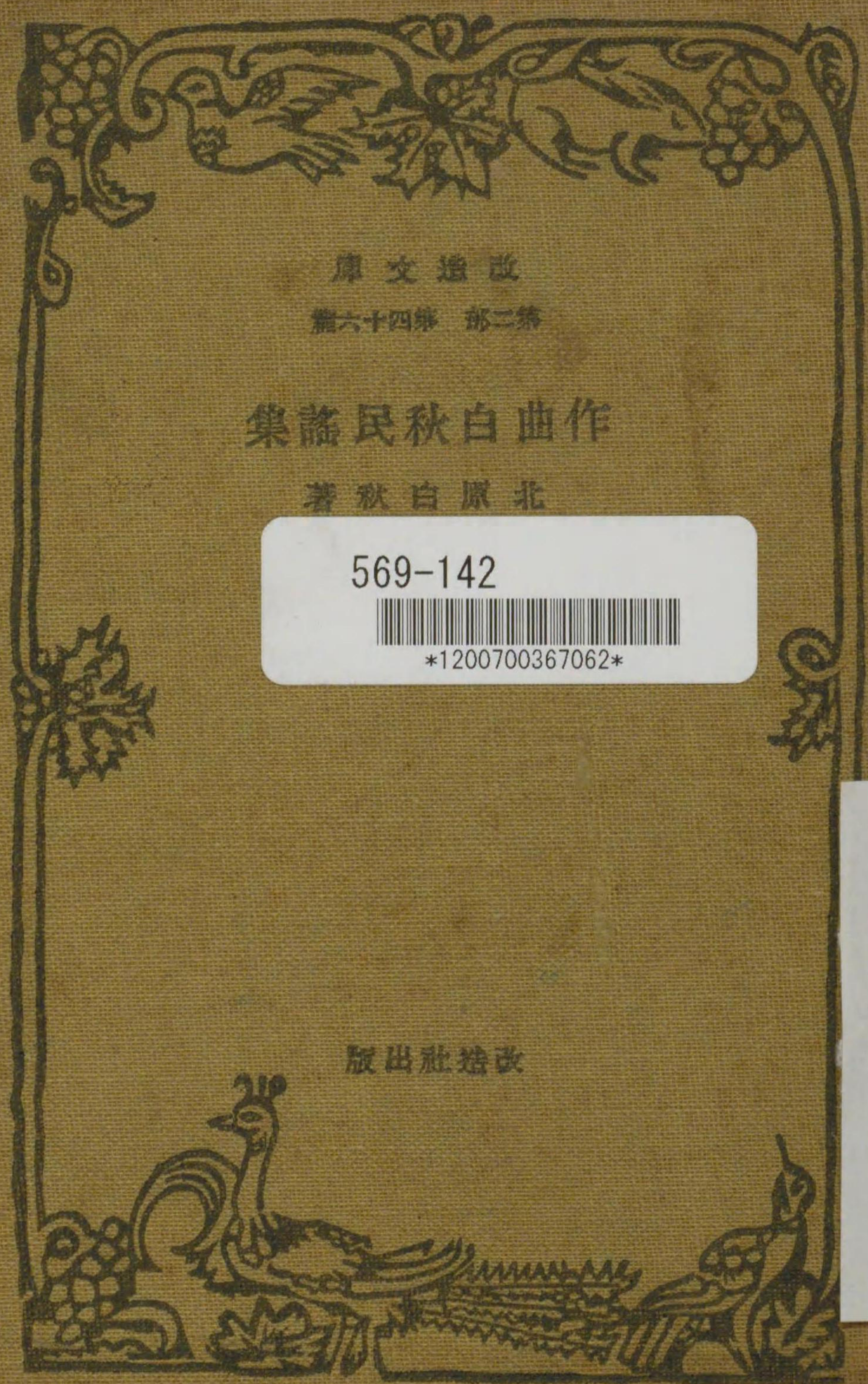
著秋白原北

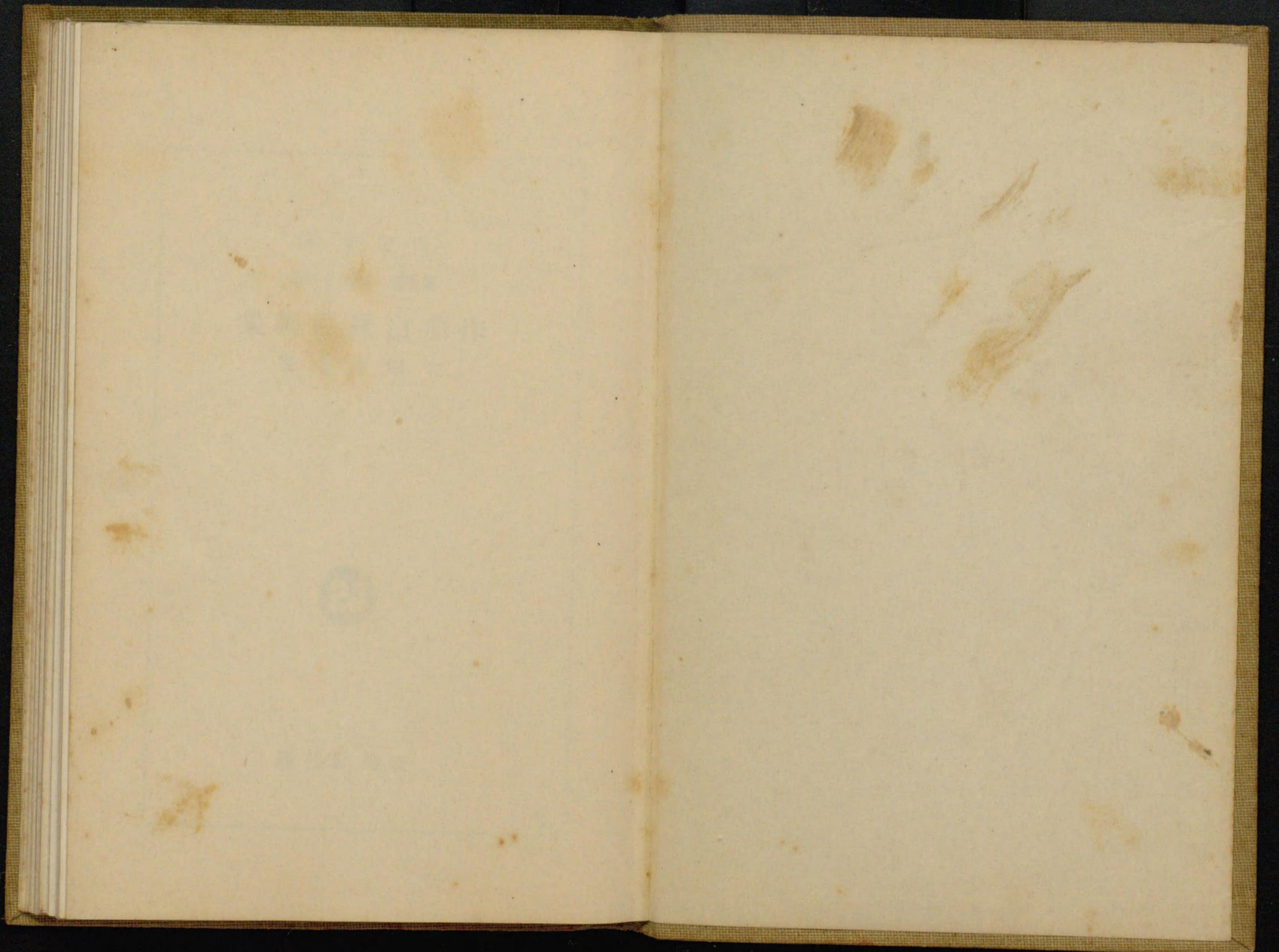
569-142



1200700367062

版出社造改





改 造 文 庫

第 二 部 第 四 十 六 篇

作 曲 白 秋 民 謠 集

北 原 白 秋 著

21

改 造 社 出 版

諸家作曲民謡

鐘が鳴ります……………七
 馬賣り……………八
 短夜……………九
 六騎……………一〇
 アイヤンの歌……………一一
 かきつばた……………一二
 氣まぐれ……………一三
 のすかい……………一四
 蟹味噌……………一五
 紫雲英田……………一六
 薄いなさけに……………一九
 池の眞菰に……………二〇

下りてくれるな……………二〇
 山と海……………二一
 あの頃……………二二
 ためいき……………二三
 日かず……………二五
 芥子の葉……………二七
 アリヤリヤンの歌……………二八
 繰糸の歌……………三〇
 烏かげ……………三三
 磯の燕……………三六
 海女……………三七
 不二の高嶺に……………三八
 不二の裾野……………三九
 夜寒……………四〇

569

142



I種

W



1200700367062

紅吹雪……………四一
 山は雪かよ……………四三
 沖の大船……………四四
 旅の大船……………四五
 あかい夕日に……………四六
 とまり船……………四六
 芭蕉……………四七
 紺屋のおろく……………四八
 空に眞赤な……………四九
 城ヶ島の雨……………五〇
 萱の千駄も……………五三
 島の日永が……………五三

町の小唄

びいる樽……………五六
 かるい背廣を……………五六
 金と青との……………五七
 薊の花……………五七
 歌ひ時計……………五八
 花火……………五八
 忠彌……………五九
 帽子ピン……………六〇
 夜曲……………六〇
 伊那と木會
 伊那……………六二
 御嶽……………六四
 諏訪……………六六

飛驒の高山……………六六
 大嶋・八丈・小笠原
 大島……………六九
 女護が島……………七一
 伊達のお腰……………七三
 紅い椿……………七四
 落つばき……………七五
 お國衆なら……………七七
 出舟……………七八
 沖の小嶋の……………八〇
 小笠原群島……………八一
 佛草花……………八四
 驟雨……………八六

博多新調

夏の宵月……………八六
 星の夜……………八七
 島で その一……………八九
 島で その二……………九一
 日の入り……………九二
 博多商人……………九五
 玄海雜曲……………九九
 柳河風
 旅役者……………一〇七
 道ゆき……………一〇八

樂譜八篇(卷末)

馬賣り……………山田耕作作曲

城ヶ嶋の雨……………" "

鐘が鳴ります……………" "

アリヤリヤンの歌……………弘田龍太郎作曲

沖の大船……………成田爲三作曲

あの頃……………中山晋平作曲

島の日永が……………小松平五郎作曲

芭蕉……………小松耕輔作曲

諸家作曲民謠

鐘が鳴ります

山田耕作作曲——以下九篇——

鐘が鳴ります、
 かやの木山に。

山は
 寒空、
 遠茜。

一つ星さへ
 ちらつくものを、

なぜに
ちらりともしも、
出て見えぬ。

馬 賣 り

泣けてしまへど
いとしの黒馬よ。

明日は馬市
汝賣りに。

仔馬見せよか、

燕麥やろか。

なまじ、月夜の
きりぎりす。

短 夜

えいやえい、えいやえい、
沖へ消ゆるは幽霊舟か、
白い日の出の雨霧に。

えいやえい。
いつそ死のかと恨んだ空も、
ええ、夜さへ明ければ、此方のもの。
えいやえい、えいやえい。

六 騎

御正忌參詣らんかん、
情人が髮結うて待つとるばん。

御正忌參詣らんかん、
寺の夜あけの細道に。

鐘が鳴る鐘が鳴る、
逢うて泣けとの鐘が鳴る。

(註) 筑後柳河の南半里に、私の郷里沖の端村がある。漁村である。昔平家の落武

者が六騎、ここに來て村を開いた。で、この村の漁夫たちのことを六騎(ロツ
キユ)と今でも呼んでゐる。御正忌は親鸞上人の御正忌である。その師走の一
週間といふもの寺々では夜の明けから鐘が鳴り、法談がある。わかい男女の樂
しいあひびきの季節である。やねとは情人のことであるが、卑俗に用ゐられる。

アイヤンの歌

いぢらしや、
ちゆうまえんだのゆふぐれに
蜘蛛が疲れて身をかくす。
ほんに蕪のむらさきに
刺が光るぢやないかいな。
アンテレガンのあん畜生はふたごころ、
わしやひとすぢに。

(註) アイヤン(下女)ちゆうまえんだ(私の實家の菜園の名)

アンテレガンはおらんだなまりでもあらうか。この句は長崎から柳河地方にかけて歌はれる「朝顔ぶし」のおしまひの囃子である。で、この唄も朝顔ぶしとして初めは作つたのである。その歌調は「有明ぶし」とよく似てゐる。なほこの唄はサノサぶしとしてもうたへる。

かきつばた

柳河の

古きながれのかきつばた
晝はオンゴの手にかをり
夜はしをれて
三味線の

ほそい吐息に泣きあかす。
ケエツグリのあたまに火ん黠いた、
潜んだと思ふたらけえ消えた。

(註) 私の郷里筑後の柳河は水郷である。いたるところに水路があり、柳があり、土橋がかゝつてゐる。子供たちがその土橋から夕焼の水にうかぶ鳩を見て囃す。ケエツグリのあたまに火ん黠いたである。ケエツグりは鳩鳥、關東のもぐつちよである。けえ消えたはかき消えたである。オンゴは柳河の言葉でお嬢さん、ゴンシヤンともいふ。良家の娘にかぎつて呼ばれるのである。これも「朝顔ぶし」の暗示を受けて作つた。

氣まぐれ

逢ひに来たちの、

日の照り雨がふるわいな。
おだんもいや、ちんこさ。

しやりむり別れたそのあとで、
未練な牡丹がまたひらく。
おだんもいや、ちんこさ。

(註) ちのは雅言のとやである。来たの、来たんですつて、柳河語。

おだんはわたしである、ちんこさは感嘆詞、全體の意味はあら厭だよ、ごあ、
同上。

のすかい

堀のバンコをかたよせて

なにをおもふぞ花あやめ、
かをるゆふべにしんなりと
ひとり出て見る花あやめ。

(註) のすかい(色を賣る女)バンコ(縁臺、おらんだ語)

蟹味噌 三首

どうせ、泣かすなら、

ピリリとござれ、

酒は地の酒、

蟹の味噌。

白で蟹搗き、

南蠻辛子、

どらせ、蟹味噌
ぬしや辛い。

酒の肴に、
蟹味噌噛ませ、
泣えてくれんの、
死んでくれ。

(註) これも柳河語の歌謡である。蟹味噌は蟹を生きながら臼に入れて搗きつぶし、唐辛子につける、その味痛烈人を泣かす。

紫雲英田

げんげ、げんげ田
雲雀が上る、

學校もどりよ、
日が永い。

げんげ、げんげ田
ばあやのお里、
まはり道しよよ、
日が永い。

げんげ、げんげ田
まだ里遠い、
幼馴染よ、
日が永い。

げんげ、げんげ田
ちよろく、流れ、

春も深めよ、
日が永い。

(註) 少女のために作つた民謠體である。

薄いなさけに

中山晋平作曲——以下七段——

薄いなさけにひかされて、
今日もほのかに來は來たが。

思ひきらうか、きるまいか、
そつと歸ろか、何とせう。

いつそあの日のくちづけを、
後のゆかりに別れよか。

思ひきらうか、たづねよか、
ええ、なんとせう、しよんがいな。

池の眞菰に

池の眞菰に今朝降る雨は
音もたてねば人知らず。

わしの心に夜降る雨は
人も知らねば名も立たず。

下りてくれるな

下りてくれるな茅萱の夜霜
霜は雉子の目をさます。

山と海

わたしや一聲、霜夜の雉子、
彼奴は野狐、ふたごころ。

山で遠いは
月夜の風よ。
ことに空ぎは、
木のこずゑ。
北の風ならなほ寒いよ。

とのほい。

沖で遠いは

日中の風よ。

ことに鳥かげ

潮のさき。

南風ならなほ暑いよ。

とのほい。

あ の 頃

辛夷の花の咲く蔭で

一人は編物してました。

一人は刺繍してました。

誰かは童話を讀みました。

辛夷の花のちる頃に

一人はお嫁にゆきました。
一人は教師になりました。
誰かは田舎で死にました。

辛夷の花のさく頃は

みんなが笑つて居りました。

みんなが歌つて居りました。

みんなが夢見て居りました。

(註) 少女のために作つたものである。

た め い き

燈ちらちら

手ぶくろ編めば、——ああ、ああ、
なぜか母さま
思ひ出す。

針のつめたさ
毛糸の紅さ——ああ、ああ、
きけば何やら、
さらさらと。

雨か、みぞれか、
また積む雪か、——ああ、ああ、
見れば硝子が
しらしらと。

遠い母さま、

わたしもひとり、——ああ、ああ、
せめて燃しましよ、
毛糸くづ。

(註) 少女のために作った歌謡である。

日かず

さんさ、
さんさ、
狭山の松の
音も
さんさ、
あと七日。

さんさ

さんさ

相模の灘の

音も

さんさ

あと二日。

さんさ

さんさ

さらばよ、様よ、

様よ、

さんさ

すぐ明日。

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。

ひとが泣かると泣くまいと、

なんのその葉が知るものぞ。

ひとはひとゆゑ身のほそる。

芥子がちらうとちるまいと、

なんのこの身が知るものぞ。

わたしはわたし、

芥子は芥子、

なんのゆかりもないものを。

アリヤリヤンの歌

弘田龍太郎作曲——以下二篇——

鳩がなきます、タンクの上で、ヨウ、
かはい聲して、ほろほろと、
蠶かみこうまれてまだ七八日、
春も暮れます、うつうつと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

月つきがで出でました、川瀬なせのあしに、ヨウ、
水みづにかやか河か鹿かもころころと、
おあ蔵あ仕し上あげあて、絲いととりそめて、
夏なつもあ過あぎます、そよそよと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン。
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

百舌もずが急せぎます、製絲所せいしじよの屋根やねで、ヨウ、
赤あかいあ陽ひにきらきりきりと、
心こころほそさに出でてそらみ見みれば、
秋あきもい去いにます、遠々とほとほと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン。
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

雪ゆきがふります、寄宿きしゆくの窓まどに、ヨウ、
障子しょうじあければちらちらと、
山やまの向むかうのあの故郷ふるさとよ、
冬ふゆもあ盡あぎます、きえぎえと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン、

アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

繰糸の歌

1

箒はらきしづかに索くち緒たしやんせ、
繭まゆは柔やは肌はだ、絹きぬ一ひと重へ。

わたしやお十七じゆしち、花はななら蕾つぼみ、
手て荒あなざるな、まだ未お通ほ女ぼ。

2

いつもほどよい繰と糸り湯ゆの繭まゆよ、
すまず、にござらず、つやつやと。

惚ほれりやほどよく、熱あついはさめる、
焼やかず、はなれず、さらさらと。

3

ひとつひとつとつけたせ、繭まゆは、
慾まにからめば度ど外が糸いと。

一ひと人りや一人ひとりに情じやう増ませ、戀こひは、
兩ふたつどりすりや、義ぎ理り知しらず。

4

截きり附づしやんすな、縁えん切きらしやるな、
卷まけば卷まきつく繭まゆの糸いと。

よりによりかけ、からんだ糸いとよ。
おまへ切きれても、わしや切きれぬ。

5

いとし小こ粹わへ卷まきとる糸いとは、

それは黄の絲、白の絲。
むしれむら絲、むらなく、きよく、
いつもむら氣じや身がもてぬ。

鳥かげ

1 繭を選び選り
薄日の窓に
何か、鳥かげ、
氣にかかる。

2 緒絲をたてたて、
繰絲湯の繭に、

何か、日が射しや、
氣がうだる。

3 撚りにつけつけ、
蠶の絲、小絲、
何か、もつれりや、
氣がぢれる。

4 坐繰りからから、
隅こで一人、
何か、百舌が啼きや、
氣が急きやる。

5
絲を繰り繰り、
大柀、小柀、
何か、光れば、
氣が焦やる。

6
東は、つやつや
白絲、黄絲、
何か、ねぢれば
氣がしまる。

7
蛹棄て棄て

小蓼のかけに、
何か、蟲啼きや、
氣がふさぐ。

(註) 以上三篇は、上州富岡原富岡製絲場の女工たち
のために作った逍遙歌や作業歌である。

島しまの鬼おに百合ゆり
早はやや花はな盛さかり、
わたしや、紅べにさす
ひまもない。

伊豆いずの岬さき見みり也
もう日ひは紅あかい。
籠かごの鮑あはびは
まだ満みたぬ。

海女

*

磯いその燕つばめの
飛とぶ影かげよりも、
海女あまの目め移うつり、
目めは早はやい。

磯いその燕つばめの
頬ほの紅べによりも、
宵よの口くち紅べに、
海女あまが紅べに。

*

磯の燕 二首

成田爲三作曲——以下八篇——

不二の高嶺に

不二の高嶺に
朝みる雲は
あはれは雪雲
風見雲。

不二の高嶺に
夕みる雲は
末は茜の
わかれ雲。

不二の裾野 三首

不二の裾野と
吹雪の夜汽車、
何處に下りよう當もない。

*
不二のしら雪
解けなば解けよ、
とても愛鷹、三島宿。

*
不二の巻狩

夜明けの篝火
今は速弾、戀の仇。

夜寒

寒い瀬の瀬の
夜の谷越えて、
逢ひに來ました。
身も冷えた。

開けてくだんせ、
大寒小寒、
飛んで來ました。
手も冷えた。

闇の瀬の瀬の
藤づるづたひ、
逃げて來ました。
身も冷えた。

紅吹雪 四首

天へ天へと
あの雪煙
お山なりやこそ、
紅吹雪。

*

いとし焔か、
焔の雪か、
不二は夜の明け、
紅吹雪。

*

雪の焔の
燃え立つ朝は
さぞやお山も
せつなかる。

*

やるせないぞへ、
あの紅吹雪
早やも後朝

不二風。

山は雪かよ

山は雪かよ、
大寒小寒、
飛んで、飛んで来た、
豆小僧。

寒い筈だよ、
北山おろし、
逃げて、逃げて来た、
豆うさぎ。

沖の大船 二首

沖の大船
月の出ござる。
明日の日和が
焼けござる。

*

沖の大船
夜の明けござる。
南風の日和が
焼けござる。

旅の大船 二首

旅の大船
錨をおろし、
月のほばしら、
うしろ梶。

*

月の大船
笛吹き澄まし
うしろ梶だて、
寄りや暗い。

あかい夕日に

小松耕輔作曲——以下二篇——

あかい夕日ゆづひについで、つまされて、
酔ようて珈琲店カフェを出では出でたが、
どうせわたしはなまけもの、
明日あすの墓場はかばをなんで知しろ。

とまり舟

葦間あしま出でて見みよ、煙けむりがあがる、
あれは時雨しぐんのもやひ舟ぶね。

立たつる煙けむりはほそぼそなれど、
やはり浮世うきよの泊とまり舟ぶね。

芭蕉

馬うまで目めざめて、峠たぎで明あけて、
夢ゆめは野末のぞの茶ちやの煙けむり。

煙けむりたつならほそぼそたちやれ、
月つきに芭蕉ばせのひとり旅たな。

紺屋のおろく

齋藤佳三作曲—以下二篇—

にくいあん畜生は紺屋のおろく、
猫をかかへて夕日の濱を
知らぬ顔して、やなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しほり、
きやしやな指さき濃青に染めて、
金の指輪もちらちらと。

にくい、あん畜生とかかへた猫と
赤い入日にふとつまされて、
瀧にはまつて死ねばよい。

ホンニ、ホンニ……………

空に眞赤な

空に眞赤な雲の色、
罎に眞赤な酒の色、
なんでこの身が悲しかろ、
空に眞赤な雲のいろ

これはもと「パンの會」の唄であつた。みんながらつば節で歌つた。その後齋藤氏によつて作曲された。

城ヶ島の雨

築田貞作曲

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
 利休鼠の雨がふる。
 雨は眞珠か、夜明の霧か、
 それともわたしの忍び泣き。
 舟はゆくゆく通り矢のはなを
 濡れて帆あげたぬしの舟。
 ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる、
 唄は船頭さんの心意氣。
 雨はふるふる、日はうす曇る。
 舟はゆくゆく、帆がかすむ。

大正二年の夏、早稻田音楽會から頼まれてこの舟唄一篇を作った。最近また山
 田耕作氏の作曲もついた。これは松前追分で歌つてもいい。

ねんね、ほろろん、
 ねんねとお遊びや、
 島しまの日ひ永ながが
 わしや泣なける。

2

島の日永が

小松平五郎作曲

萱かやの千せん駄だも
 しよはせて置おいて、
 誰たれが後あとから
 火ひをつけた。

萱の千駄も

本居長世作曲

ゆたりゆたりと、
正覺坊と轉びや、
島の日永が
わしや泣ける。

ゆたりゆたりと
岸うつ波よ、
島の日永が
わしや泣ける。

3

のろりひよろりと。
阿呆鳥を追へば、
島の日永が
わしや泣ける。

のろりひよろりと、
逃げ出す鳥よ、
島の日永が
わしや泣ける。

町の小唄

九篇

喇叭節なぞに合せて

びいる樽

ころがせころがせびいる樽
赤い夕日のなだら坂
とめてもとまらぬものならば、
ころがせころがせびいる樽。

かるい背廣を

「パンの會」の頃の唄である

かるい背廣を身につけて、
今宵またゆく都川。

戀か、ねたみか、吊橋の、
瓦斯の薄黄が氣にかかる。

金と青との

金と青との愁夜曲
春と夏との二聲樂
わかい東京に江戸の唄、
陰影と光のわがころ。

薊の花

今日も薊の紫に、

刺とぎが光ひかれば日は暮くれる。
いつか野のに來きてただひとり
泣ないた年とし増まがなつかしや。

歌ひ時計

けふもけふとて氣きまぐれな
晝ひるの日ひなかにわが涙なみだ
かけて忘わすれたそのころに
銀ぎんの時とき計けいも目めをさます。

花 火

一

銀ぎんと緑みどりの孔雀くわんせう玉たま
パツとしだれてちりかかる。
義ぎ理りと情なさけの孔雀くわんせう玉たま
涙なみだしとしとちりかかる。

二

夏なつの夜よごとの遠とほ花はな火び
紅あかくとりけてちりかゝる。
わかいこころの孔雀くわんせう玉たま
薄うすい月つき夜よに消きえかかる。

忠 彌

雪ゆきはちらちらふりしきる。

城の御濠の深みどり、
小石投げつけ、千鳥足、
いまは忠彌が身のみつまり。

帽子ピン

憎い殺すで、なぜ泊めた、
それは昨夜の帽子ピン、
とかくお前はつきつめる、
あれよ、お午の鐘が鳴る。

夜曲

1

月は桃色、
宵の月、
窓に腰かけ、街の月、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて爪弾きマンドリン。

2

雪は紫、
宵の雪、
窓から、チラチラ、遠燈、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて遠目にマンドリン。

伊那と木會

四篇 在來の調に合せて

伊那

1

信州、伊那の谷、
木瓜の花盛り。

春蠶かへそか、
春蠶かへそか、
婿とろか。

2

伊那は夕焼。

高遠は小焼。

明日は日和か、
明日は日和か、
明日は日和か、
繭賣ろか。

3

桑の夜霜に
ちらつく星は。

夫婦星かよ、
夫婦星かよ、
夫婦星かよ、
まだ明けぬ。

御嶽

1

空が近いか、
御嶽さんは、
いつも高風、
高吹雪。

2

七つ星見りや、
まだ夜は夜中、
雪の御嶽、
雪明り。

3

惠那の雪見て
御嶽見れば、
まだも遙かや、
越の雪。

4

木曾の御嶽
朝焼ござる、
着けて出やんせ
蓑と笠。

諏訪

諏訪の明神

1

おなさげござる、
氷張りやんせ、
また逢ひに。

2

上と下では
一目で通ふ、
篝火つけやれ、
諏訪の湖。

3

上げよ、鹿の角
七十四と一つ、

願かなへて、
諏訪の神。

4

戀のお守り、
法しよの兜、
守りたまはれ、
諏訪の神。

飛彈の高山

飛^ひ彈^だの^た高^か山^ま
吹^ふ雪^ぶか、
雨^あか。

せめて、美^み濃^の路^ぢよ、
(せめて、美^み濃^の路^ぢよ)
柿^か日^ひ和^り。

大嶋八丈小笠原

十六篇

大嶋節と八丈のしよめ節

大嶋

(大嶋節である)

1
髪^かは^ま背^せの^た丈^け
油^あは^ら椿^{つばき} ヨ、
いと^しア^ンコ^は、
島^{しま}そ^だち。 ヨ。

2
月^{つき}の^{つばき}椿^{つばき}の、
花^はか^げゆ^けば、 ヨ、
油^あ搾^{しめ}木^ぎの、
サア、

音ばかり。ヨ。

3

アニコ御不在か、

また夜あるきか、ヨ、

月の寢宿か、サア、

花かけか。ヨ。

4

アニコ小憎くや、

そうめん絞り、ヨ、

誰に解かした、サア、

洗ひ髪。ヨ。

女護が島

1

女護が島じやよ、

殿ならおじやれ。

男後生樂

手はとらぬ。

2

南風じやぞ、

みな出しておじやれ

迎へ草履の

紅鼻緒。

3
穿かば穿かんせ、
ただ殿まかせ
紅い鼻緒の
投げ草履。

4
沖の青ヶ島
殿御の島よ。
南風そよそよ、
女護が島。

伊達のお腰

1
伊達のお腰の
練玉の紐は、
誰も觸れねど
しやらくと。

2
觸れちやくれまい、
練玉の紐に、
島の娘は
一重帯。

紅い椿

紅い椿を、
一寸、目で知らせ、
知らぬ顔して、
さて、しやらり。

紅い椿の
花かけ出れば
知らぬ顔して、
また、しやらり。

落つばき

紅いつばきよ、
髪梳きましよか、
ここは谷かげ、
かくれ井戸。

わしが髪梳きや
ぼんと首たたき、
紅い椿よ、
誰が逃げた。

3
ほとと落ちたは
紅玉つばき、
誰もおじやらぬ、
島つばき。

4
誰も見もせぬ、
また來もせぬが、
紅いつばきが、
また落ちた。

お國衆なら

1
お國衆なら
持て來てたもれ、
戀のむだ花
わすれぐさ。

2
いかな、忘りよか、
お國の人は
泣きの涙を
置土産。

出舟

1

いよよ別れか、
ばらばら松か、
ここは櫛立、
はや泣ける。

2

八丈八重根の
瀬の瀬の岩よ、
汐の走りを
なぜ堰かぬ。

3

船の纜とらづな
ふつりと切れりや、
縁が切れたと、
逃げる氣か。

4

八丈八重根の
後追ひ千鳥。
舟も出たじやに
なぜ死なぬ。

沖の小嶋の

1
沖おきの小こ嶋しまの
ちらちら雪ゆきは
すぐにこぬかの
雨あめとなる。

2

深ふかくなりやこそ、
八丈はちじやうの雪ゆきは、
すぐに別わかれの
雨あめとなる。

小笠原群島

1
お父おとと、父ちち嶋しま
お母おか、母はは嶋しまよ。
離はなればなれの
秋あきの雲くも。

2

わたしや、父ちち嶋しま
父おとと親おやがかり。
いと母はは嶋しま
去さられ嶋しま

父の島から
背伸して見れば
うみの母島
乳房島。

父の島より
兄島恐や、
風の出潮は
なほ恐や。

弟島かよ、

皆朱の崖に、
椰子がちよぼちよぼ、
棄兒島。

婿と嫁島、
また時化ぐもり、
間の媒介島。
疝氣島。

妹島かよ、
継子の姉か、
なまじ朝焼、
すぐ時化する。

佛草花

1

おまへ、佛草花の
紅い花盛り、
氣儘さしやんせ、
今盛り。

2

紅い佛草花の
まだ、あの背戸に、
なにか忘れた
氣がしてる。

3

紅い佛草花の
咲く窓越えて
來いと誰が云うた
月に云うた。

4

月に見つけた、
佛草花の垣に、
誰か忘れた
獨木舟の櫂。

驟雨

さアと来たせか、
からりと霽れて、
島は男の宵の月。

夏の宵月

島は宵月、
宵からおじやれ、
かはい獨木舟で
早やおじやれ。

星の夜

今は宵月、
夜ふけておじやれ、
濱はタマナの
花ざかり。

宵の明星の
線ひく海は
月の夜よりか
まだ白い。

2
椰子の葉末の
ぬか星なれば、
まだもチラチラ、
眼も合はぬ。

3
天の川かよ、
一本椰子か。
浪の音かよ、
夜のふかさ。

4
せめて、夜の明け、

満潮待ちやれ。
星のチラチラ
見て漕ぎやれ。

島で
その一

1
島で畑うちや、
遙かなものよ。
海のはたてに
日が落ちる。

2
島で甘黍刈りや、
果敢ないものよ。

雲の影ばかり
見て暮れる。

3

島で木を挽きや
かすかなものよ。
磯の香もする
聲もする。

4

島で牛が啼きや。
ひもじいものよ。
浪の響で
日はひる。

島で
その二

島で餓ゑりや、
つれないものよ。
腐れバナナの
油蟲。

*

島で砂糖磨きや、
せつないものよ。
黒い汁ばかり
出て凝る。

島しまで血ちを吐はきや
もうおさらばよ、
どうせ、深ふか海うみ
鱈たかの餌えさ。

*

日の入り

1

海うみの遙はるかに
日ひの入いるころは、
こころほそさよ、
身みの小ちささ。

遠とほく離はなれて
泣なきたい時ときは、
せめて、磯いそ端はた
舟ふね見み山やま。

2

3

かぎり知しれねど、
また山やまのぼり、
せめて、日ひの入いり
海うみのはて。

4

西にしは日ひの入いり、

東は月夜、
なまじ、遠風、
雲の紅。

博多新調 二篇

博多商人 四篇

これらは博多節に合わせて作つたものである。博多商人や八幡船を歌つた。

1

博多、
商人、
「お出でましたかね。」
どんたく日和。

「昔や、唐船、
八幡船。」

兵兒へいごに青竹あおたけ
伊達だての帯おび。

「柳町やなぎまちから可愛い小女郎こぢよらが出て招まねく、

ハイ、今晚こんばんは。」

2

今日は、「お出いでましたかね。」
どんたく、
皆みなさま御免ごめん。

「仁輪にわ加かで御溜飲ごりゅういん
一寸いちいと下さげて、

明日あすは商人あきうど、

縞しろの帯おび。

「酒樽さかだるボンとたたいて浮かしやんせ、
サア、どんたくだ。」

3

博多はかた、「乗り出だしまつしよかね。」
出でてから、
唐津からつで月夜つきよ、

「おも梶かぢ
とり梶かぢ
八幡船やわたぶね」

平戸ひらど、嚴原いづはら
星ほしあかり。

瀬戸は、
早鞆、
迅風で通よや、

1

「ちらちら燈は
下の關」

玄海雜曲 八篇

これもおなじく博多ぶしである。

「ジャガタラ、
天竺、
ハア、
よか風ね。」

灘は、
玄海、
平戸は瀬戸よ。

4

「澳門過ぎれば暹羅國。」

ハア、よか風ね。」

「博多小女郎を
一寸と乗せて。」

船は唐船、
浪まくら。

帆は一汐、
帆は軽い。

「お月さんも一寸と出て門司の岬、
ハイ、今晚は。」

2

海の、「お出でましたかね。」
中道、
ふつりと絶えて。

「あちらは玄海、
こちら博多。」

波はたかの島

離れ島。

「お月さんが一寸と出て松のよこ、
ハイ、今晚は。」

3

芥屋の、「お出でましたかね。」
大門の
汐漚なれば、

「戻るにや戻れず、
浮ばれず。」

果てはしら波、
闇の泡。

「お月つきさんがちらと出でて、岩いわの外そと、
ハイ、今晚こんばんも。」

4

沖おきの、「お出いでましたかね。」
小島こじまか、
裏向うらむきき島しまか。

「紅あかい襪たすきを
一寸ちよいと投なげて。」

小燒こやけ 朝燒あさやけ
すぐ燒やける。

「燒やけるなら燒やけなはつても、こんがりと、
サア、また來きたね。」

5

岸流がしりう 「お出いでましたかね。」
島しまかよ、
十六じふろくむさし。

「賭搏ぼくちは好きなり、
酒さけは飲のむ。」

つまりや、身みのはて、
波なみのはて。

「お前まへさんの兩刀りやうとうづかひにやかなやせぬ。」

ハア、こりこりだ。

6

博多、「お出でまつしよかね。」
しぼりか、
小倉の帯か。

狐は啼き出す、
雨はふる。」

とても、久留米の
紺がすり。

「おこんさんが一寸と出て置のかげ。」

ハイ、今晚は。」

7

誰を、「お出でましたかね。」
呼ぶやら、
呼子の瀬戸で、

「港は何處じやと
平戸船。」

波に千鳥が
ちりちりと。

「お星さんがチラチラと浪のかげ
また、今晚も。」

九十、「お出でましたかね。」
九島の
數ほど通よて。

「今宵は百夜さ
ただ一目。」

呼べど呼子の
はぐれ鳥。

「お星さんがチラチラと浪の外、

また、明晩も。」

柳河風

柳河風 二篇

旅役者

野毛の山からのうえといふ明治の流行唄に合したものである。

けふがわかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ、
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

よその畑に、のうえ、
麥の畑に、のうえ、
ひとり、さいさい、からしの
花がちる、しよんがいな。

道ゆき

鯨まじらと黒鯛ちんいのをと、

黒鯛ちんいのをと、

鯨まじらと、のうえ、

肥ひ前山まへやまをば、やんさのほい、けさ越こえた。ばいとこずいずい。

後家ごけと、按摩あまさんと、

按摩あまさんと、

後家ごけと、のうえ、

蜜柑みつだん畑はたけから、やんさのほい、昨夜よる逃にげた。ばいとこずいずい。

これは、ばいとこずいずいぶしである。
前聯は柳河地方のそれをそのまま用ゐた。

8va ヲめはのすゑの Cha
Yu-me wa no tu we no, Cha

のけむり。 *p* *morendo*
no ke mu ri.

8va *tranquillo*

8va

mf けむりたつならほそぼそたちえ
Ke mu ri ta tu na ra, ho so bo so ta cha re.

mf *P* *dolce*

つきに芭蕉
Tu ki ni Ba sho

cresc の *p*
no, hi to ri ta

dolce

ひ *tranquillo*
hi

mf *poco p* *p*

pp *ppp* *dim.* *pppp*

mf し ま の ひ な が が
し ま の ひ な が が

わ しゃ な け る よ
わ しゃ な け る よ

1. 2. 3. last time only

芭蕉

小松耕輔作曲

Andante moderato. *K. Komatsu.*

p dolce

p *rit.* *p*

ま で め ざ め て た う げ て あ け て
ma de me za me te. to - ge - de a - ke te. *Sva.*

ひーごりはーあ みものーし てましーた
 ヒーゴリハーオ ヨメニユ キマシエタ
 みーんながーわ らつてーを りましーた

ひ どりーはーし しゅうを し てましーた
 ヒ トリハーキ ャ クシニ ナ リマシエタ
 み んながーう たつて を りましーた

た れかーはーご うはをーよ みましーた
 タ レカハーキ ナ カデシニマシエタ
 み んながーゆ めみてーを りましーた

鳥の日永が

小松平五郎作曲

呑気に、惱ましくあまり遅くなく。

mf ねんねーほろろん ねんねと
 ねんねーほろろん ねんねの

あそびや
 おはと

沖の大船

成田爲三作曲

mf
オキノタイセン
おきのたいせん

mp (左) (右) mf

ツキノアゴザル アスノヒヨリガ
よのありじげら はえのひよりが

I II
アゴザル ャリジガ

mp (左) (右)

mp

あの頃

中山晋平作曲

1. こぶしの はな の さくかげで
2. コブシノ ハナノサキヨロニ
3. こぶしの はな の さくころは

アリヤリヤンの歌

弘田龍太郎作曲

おそく *mf*

はつ百ゆ ときががが 啼き出急ふ きまします タンかはい クせじく ののの うへし根ど

p

ヨウ 一 か はい こゑ し て ほろ 一
ヨウ 一 み づ か じ か も ろ 一
ヨウ 一 あ か 陽 に 来 ち り 一
ヨウ 一 障 子 あ け れ ば ち ら 一

pp

ほろ と か い こ う ま れ て ま だ 一
ろ と お ま ち 任 上 け て ま い と 一
こ と お こ の ぼ そ さ の の 出 て 一
ち と や の む か う の あ の の 一

dolce

mf

な な や う か は る も 暮 れ ま す 一
と り を め な な つ も 過 ぎ ぎ ま ま す 一
や ま 見 れ と あ っ も 去 ぎ に き ま ま 一
ふ る さ と ぶ っ も 盡 き に き ま ま 一

う つ う つ こ 一 一 ア リ リ ン 一
そ よ そ よ と と 一 一 ア リ リ ン 一
と ほ と ほ と と 一 一 ア リ リ ン 一
き え き え と と 一 一 ア リ リ ン 一

p *pp* *rit*

コ リ リ ア リ リ ソ ロ リ 一
コ リ リ ア リ リ ソ ロ リ 一
コ リ リ ア リ リ ソ ロ リ 一
コ リ リ ア リ リ ソ ロ リ 一

p *pp* *rit*

poco esilare a tempo

p なり - ま す *mf* か や - の *pp* さ や ま *mf*

mf ； や ま - は *p* さ む ら *p* *mf*

mf と は あ か *p* *mf* ひ と - つ

p - は し - さ *mf* ち ら - つ く - も の - を

pp delicatissimo な ぜ - に *p* ち ら び と も *mf* *pp* ち

pp ん ぐ *pp* *mf* *p*

esilando

とほりやのはなを　ぬれ-て　ほ　あけ　た

ritard. *a tempo*

ぬし-の　よ　ね

colla voce *a tempo* *mf*

f *f*

ええ-　よねはろ　で　や　る　ろはうた-でやる

mf *f* *p*

う　た　は　船　頭　の　ん

mf *ritard.*

こ　こ　ろ　い　き

mf *p* *mf* *p* *dim.*

Tempo I

pp

あ　め-は　よ　る-　よ　る　日　は　-　う　た　-　の

城ヶ島の雨

山田耕作作曲

Lento
tranquillamente [M. M. ♩ = 80]

あ め - は ふ る -
よ る 城ヶ島のいそにり

休 - ん だ - ん の あ め が ふ
る - あ め - は し ん 珠 か よ あ け の き り - か - そ れ と も わ た し
の し - の - ひ な き ふ わ は ゆ く ゆ く

tristezza pp sotto voce mf len.

い し の あ

p riten p mf p len

え あ は う ま い ら わ

mf p

し り に

poco lento p mf p

こ う ま み せ よ か か ら す じ ぎ や ろ か

p esilare pp molto riten. p colla voce p colla voce

な ま じ つ き よ の あ

riten pp poco p pp ppp

あ さ り じ

馬 賣 り

山 田 耕 作 作 曲

[不安な様でかかると]

sempre sotto voce

esitare

a tempo

な り - て - し - ぬ -

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行

所 版
權

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番

改 造

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一二二四番
至一二二四番

改造文庫 第二部第四十六篇
作曲白秋民謡集 定價二十錢

著 者	北 原 白 秋
發 行 者	山 本 美
印 刷 者	杉 山 愛 二

東京市芝區愛宕下町四ノ六
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

刷印舍英秀社會式株

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日日數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的の一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

- 此の文庫は、内容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
- 此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。
- 此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
- 表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。
- 一冊の分量は約百頁以上五百頁とし

定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附録等挿入の場合は、必ずしもこの例に依らず。

□表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	定價(錢)	送料(錢)
1	一〇	二
2	二〇	四
3	三〇	六
4	四〇	八
5	五〇	一〇
6	六〇	一二
7	七〇	一四
8	八〇	一六

改造文庫第一部目録

第一篇 富國論(上卷)	アダム・スミス著(近刊)
第二篇 富國論(中卷)	アダム・スミス著(近刊)
第三篇 富國論(下卷)	アダム・スミス著(近刊)
第四篇 人口論	ロバート・マルサス著(近刊)
第五篇 經濟學原理	デギト・リカアド著(近刊)
第六篇 經濟學原理(上卷)	スチユアド・ミル著(近刊)
第七篇 經濟學原理(下卷)	スチユアド・ミル著(近刊)
第八篇 經濟學方法論	カール・メンガー著(近刊)

第九篇 經濟學原理	チエボン・ス著(近刊)
第一〇篇 社會主義の發展	エンゲルス著(近刊)
第一一篇 マルキシズム論	石川準十郎著(近刊)
第二篇 辯證法的唯物觀	山デイツゲン著(近刊)
第三篇 哲學の實果	山デイツゲン著(近刊)
第四篇 神と國家	バクレーニ著(近刊)
第五篇 婦人論	山ベ川菊榮著(近刊)
第六篇 古代社會(上卷)	モルガン著(近刊)
第七篇 古代社會(下卷)	モルガン著(近刊)
第八篇 エミール(上卷)	ルソウ著(近刊)

第十九篇 エミール(下卷)	ルソウ著(近刊)
第二〇篇 國家論	オツペンハイマー著(近刊)
第二一篇 金融資本論	猪俣津南雄著(近刊)
第二二篇 日本開化小史	田口卯吉著(近刊)
第二三篇 日本經濟論	田口卯吉著(近刊)
第二四篇 日本經濟學說要領	瀧本誠一著(近刊)
第二五篇 日本商業史	横井時冬著(近刊)
第二六篇 日本工業史	横井時冬著(近刊)
第二七篇 經濟學の實際知識	高橋龜吉著(近刊)
第二八篇 リッケルト論文集	リッケルト著(近刊)

第二九篇 フッサール論文集	フッサール著(近刊)
第三〇篇 女工哀史	細井和喜藏著(近刊)
第三一篇 婦人解放論	スチユアド・ミル著(近刊)
第三二篇 社會進化と婦人の地位	ラツパポート著(近刊)
第三三篇 共產主義小兒病	レーニン著(近刊)
第三四篇 二十世紀初頭の農村問題	レーニン著(近刊)
第三五篇 文學と革命	トロツキイ著(近刊)
第三六篇 幸徳秋水集	幸徳秋水著(近刊)
第三七篇 中江兆民集	中江兆民著(近刊)
第三八篇 財産起源論	レヴィンスキイ著(近刊)

第三九篇組 織 論 鈴レ 木ニ 厚譯(刊近)

改造文庫第二部目錄

第一篇 古 事 記 澤瀉 久孝校訂(刊近)	第八篇 枕 草 紙 山岸 德平校訂(刊近)
第二篇 萬葉集(上卷) 折口 信夫校訂(刊近)	第九篇 金 槐 集 幸田 露伴校註(刊近)
第三篇 萬葉集(下卷) 折口 信夫校訂(刊近)	第一〇篇 平 家 物語 語 山口 剛校訂(刊近)
第四篇 古 今 集 吉澤 義則校註(刊近)	第一篇 雨 月 物語 語 山口 剛校訂(刊近)
第五篇 新 古 今 集 吉澤 義則校註(刊近)	第二篇 山 家 集 齋藤 茂吉校註(刊近)
第六篇 新編源氏物語(上卷) 折口 信夫校註(刊近)	第三篇 俳 諧 七 部 集 萩原 蘿月校訂 3
第七篇 新編源氏物語(下卷) 折口 信夫校註(刊近)	第四篇 燕 村 七 部 集 萩原 蘿月校訂(刊近)
	第五篇 伊 勢 物 語 久松 藩一校訂(刊近)
	第六篇 神 皇 正 統 記 宮地 直一校訂(刊近)
	第七篇 芭 蕉 翁 文 集 道 萩原 蘿月校訂 3

第一八篇 曾 根 崎 心 中 獄 黑木 勘藏校註(刊近)	第二八篇 菅原傳授手習鑑 黑木 勘藏校註(刊近)
第一九篇 心 中 天 鳥 宴 黑木 勘藏校註(刊近)	第二九篇 八百屋お七歌祭文 黑木 勘藏校註(刊近)
第二〇篇 國 姓 爺 合 戰 黑木 勘藏校註(刊近)	第三〇篇 伊賀越道中双六 黑木 勘藏校註(刊近)
第二一篇 槍 權 三 重 帷 子 黑木 勘藏校註(刊近)	第三一篇 大 鏡 吉澤 義則校註(刊近)
第二二篇 心 中 重 井 筒 黑木 勘藏校註(刊近)	第三二篇 徒 然 草 吉澤 義則校註(刊近)
第二三篇 山崎與次兵衛壽 黑木 勘藏校註(刊近)	第三三篇 日 蓮 上 人 集 吉澤 義則校註(刊近)
第二四篇 傾 城 反 魂 香 黑木 勘藏校註(刊近)	第三四篇 親 鸞 上 人 集 吉澤 義則校註(刊近)
第二五篇 淀 鯉 出 世 瀧 德 切 黑木 勘藏校註(刊近)	第三五篇 北 村 透 谷 選 集 島崎 藤村編 1
第二六篇 堀 多 小 女 郎 波 鼓 枕 黑木 勘藏校註(刊近)	第三六篇 樋 口 一 葉 選 集 樋口 一葉著 1
第二七篇 大 經 師 昔 曆 黑木 勘藏校註(刊近)	第三七篇 平 凡 二葉亭主人著 1

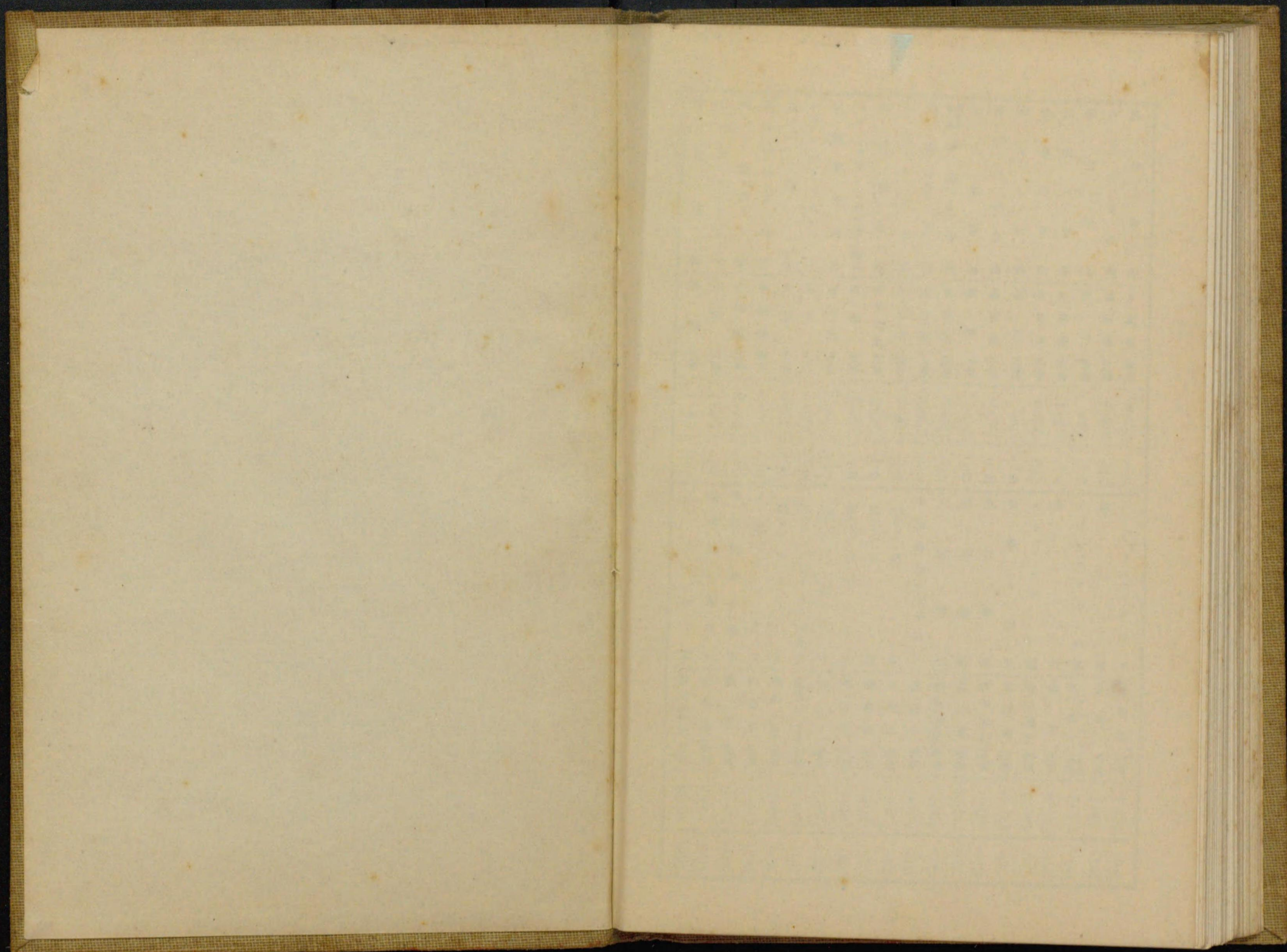
第三八篇	子規俳話	正岡子規著	近刊	第四八篇	厭世家の誕生日	佐藤春夫著	1
第三九篇	子規歌話	正岡子規著	近刊	第四九篇	日輪	横光利一著	1
第四〇篇	坊つちやん	夏目漱石著	2	第五〇篇	労働者の居ない船	葉山嘉樹著	1
第四一篇	草枕	夏目漱石著	2	第五一篇	海に生くる人々	葉山嘉樹著	2
第四二篇	それから	夏目漱石著	3	第五二篇	小公子	子バアネツト著	2
第四三篇	悲しき玩砂具	石川啄木著	2	第五三篇	ホワイト・フランク	塚利彦譯	3
第四四篇	我等の一團と彼雲は天才である	石川啄木著	1	第五四篇	はやり唄	小杉天外著	近刊
第四五篇	山陰土産その他	島崎藤村著	2				
第四六篇	作曲白秋民謡集	北原白秋著	2				
第四七篇	獄中記	オスカア・ワイルド著	近刊				

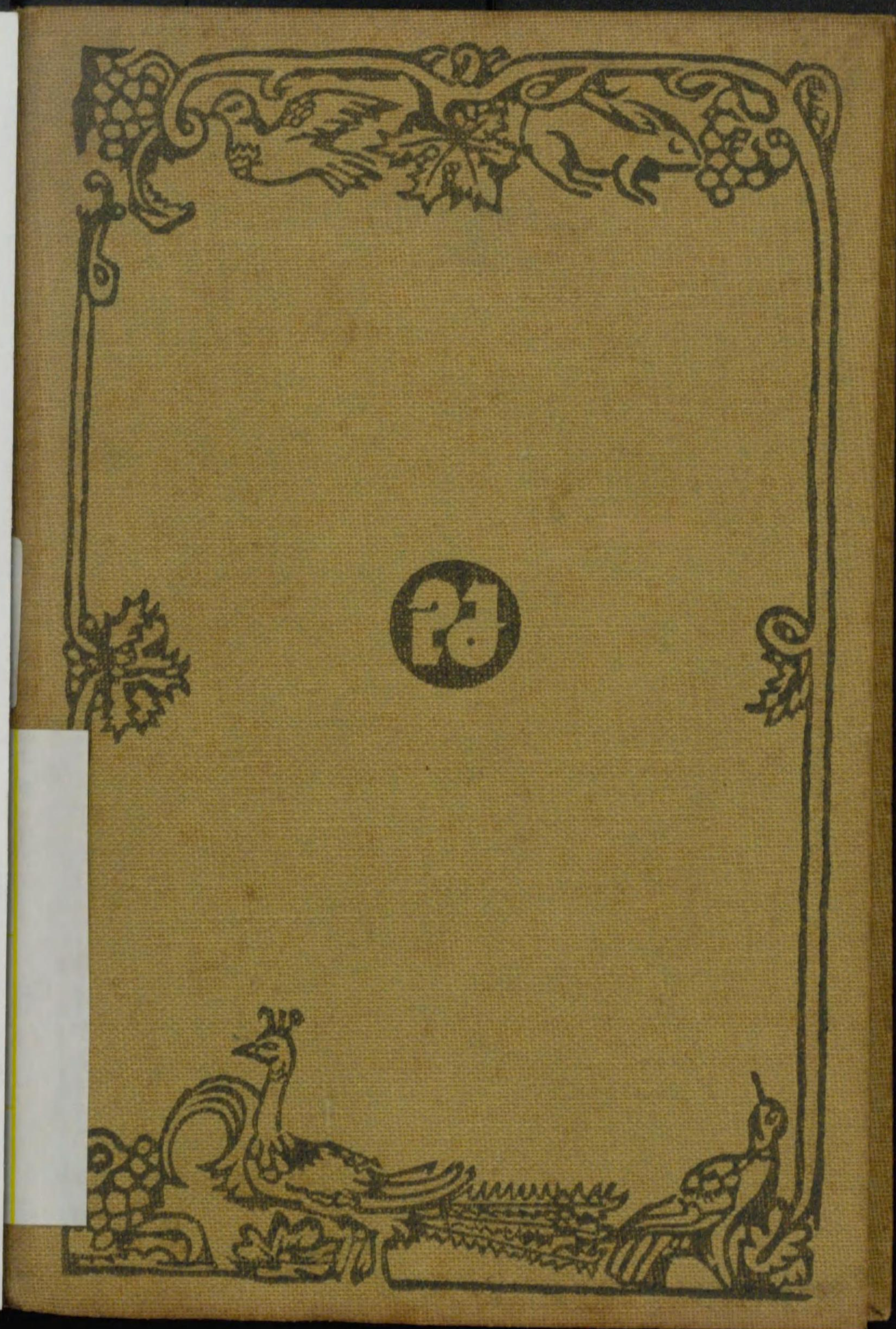
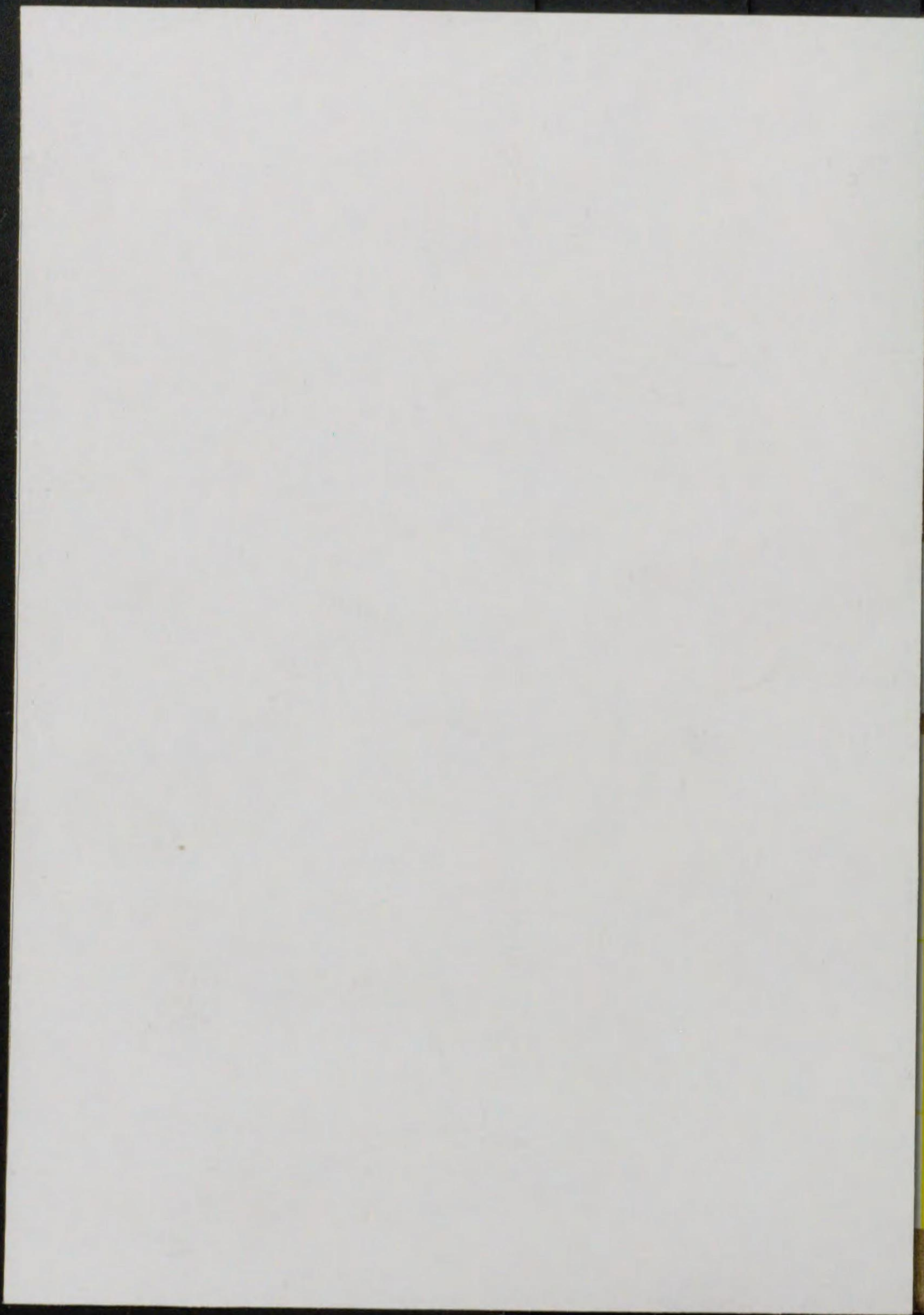
(以下續刊)

改造社圖書目録		政治・法律・經濟・社會		勞働問題	
書名	著譯者	定價	送料	書名	著譯者
離婚制度の研究	穂積重遠著	二〇〇〇	二二六	勞働問題	渡邊一郎著
家族制度と婦人問題	河田嗣郎著	二〇〇〇	二二〇	農政四十三講	河田嗣郎著
婚姻の基礎	宮本英雄著	一五〇〇	二一八	農村問題と對策	河田嗣郎著
現代法律思想の研究	高切賢三著	四八〇〇	二二七	農業問題研究	河田嗣郎著
小作法と自作農創定法	澤村康著	四八〇〇	二二七	土地問題論	河田嗣郎著
訂正普通選舉法要綱	阪内事務官共著	六〇〇〇	二二六	農村問題研究	河田嗣郎著
法と宗教と社會生活	田中耕太郎著	二五〇〇	二二四	日本農民史語彙	小野武夫著
私法學序説	廣濱嘉雄著	三〇〇〇	二二六	近世農村問題史論	小野武夫著
ソヴィエトロシアの民法と勞働法	末川博著	二五〇〇	二二二	社會政策と階級闘争	福田徳三著
法の窓閑話	末弘嚴太郎著	二五〇〇	二二二	社會運動と勞銀制度	福田徳三著
嘘の効用	末弘嚴太郎著	二六〇〇	二二二	ボルシェヴィキズム研究	福田徳三著
法律に於ける階級闘争	平野義太郎著	二五〇〇	二二六	レニニズム	小泉信三著
現代日本の政治過程	森莊三郎著	二五〇〇	二二二	社會主義と社會主義	高島素之著
大衆に呼びかける	大山郁夫著	二五〇〇	二二二	社會主義と進化論	高島素之著
勞働法總論	孫田秀春著	二六〇〇	二二四	社會主義と國家主義	高島素之著
勞働政黨と勞働組合	富田士辰著	二九〇〇	二二四	資本主義末期の研究	高橋龜吉著
				國家思想の研究	口田康信著

考註切支丹鮮血遺書	靈の王國	先立ちて来るもの	哲學思想の史的考察	無産階級の哲學	學校兒童心理學	物理學と認識	自體宗教の研究	現代教育哲學の根本問題	日本道徳論	藝術哲學	生の哲學	ディールのタイの哲學	ジムのタルの經濟哲學	新カント派の歴史哲學	リツケルトの歴史哲學	カントの平和論	グントの民族心理學	智能心理學	
松崎實編	室伏高信著	大澤隆一著	山本義典著	山本義典著	山本義典著	桑木或雄著	佐藤繁彦著	長田新著	清原貞雄著	植田壽藏著	小川義章著	勝部謙造著	恒藤恭著	板垣應穂著	米田庄太郎著	朝永三十郎著	桑田芳藏著	松本亦太郎著	
三五〇	一五〇	一五〇	二〇〇	二五〇	二七〇	一五〇	二八〇	三〇〇	四五〇	二七〇	二八〇	二〇〇	三〇〇	一五〇	四七〇	一五〇	三五〇	九〇〇	
二八	一八	一六	二二	二二	二二	二八	二二	二〇	二四	二四	二四	二〇	二〇	一八	二六	一八	二四	三六	
戀愛・價値論	ロマンチク時代	文學に志す人へ	吉利支丹文學抄	近現代の戀愛觀	露國現代の思潮及文學	學藝論	文藝管見	近代文明と藝術	愛する人々へ	苦悶の象徴	苦悶の象徴	文藝管見	近代文明と藝術	愛する人々へ	苦悶の象徴	苦悶の象徴	苦悶の象徴	苦悶の象徴	苦悶の象徴
石原純著	太宰施門著	武者小路實篤著	村岡典嗣著	厨川白村著	厨川白村著	阿部次郎著	里見弾著	吉江喬松著	有島武郎著	厨川白村著	竹内義雄著	長尾正人著	樋口繁次著	佐藤・庄司共著	中澤臨川著	錦田義富著	鳥野三郎著	鳥野三郎著	
一六〇	二〇〇	一三〇	三五〇	二五〇	四八〇	二二〇	一一〇	二〇〇	三〇〇	一八〇	三五〇	一八〇	一〇〇	三〇〇	一八〇	二〇〇	二〇	二〇	
一八	二〇	一八	二八	二二	三〇	二〇	二六	二〇	二四	二〇	二八	二四	二八	二四	二八	二〇	二八	二八	

日本殖民地經濟論	世界經濟觀	唯物史觀	日本社會史	日本社會史	近世封建社會の研究	唯物史觀のたぬに	經濟學批判のたぬに	封建社會統制と闘争	帝國主義研究	石油帝國主義	女工哀史	思想闘争	思想闘争史上に於ける	青年學生と政治	民衆の苦悶	文藝の革命	生存競争の哲學	社會問題綱要	
持地六三郎著	富士・横田著	富士・横田著	本庄榮治郎著	本庄榮治郎著	本庄榮治郎著	福本和夫著	福本和夫著	黒正慶著	猪俣津南雄著	荒知・柴村著	細井和喜藏著	森戸辰男著	森戸辰男著	森戸辰男著	森戸辰男著	佛國・和歌山・一著	賀川豊彦著	河田嗣郎著	
二八〇	二〇〇	三五〇	二五〇	二五〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	三五〇	一〇〇	一五〇	二〇〇	二〇〇	三五	三五	一三〇	二〇〇	二〇〇	四五〇	
二四	二二	二八	二四	二四	二二	二八	二八	三〇	二八	二〇	二〇	二四	二四	二四	二六	二〇	二二	二七	
心理學講話	哲學・宗教・科學	國際經濟總論	國際經濟と國民經濟	貨幣・銀行・外國爲替(上)	貨幣・銀行・外國爲替(下)	金貨本位制の興廢	英國預金銀行論	中世寺院法と經濟思想	階級及第三史觀	近世商業史	明治維新經濟史	經濟學原理(四冊)	唯物史觀經濟史の再吟味	野田大労働争議	日本社會經濟編年史	英國資本主義成立史	大衆時代の解剖	老子の研究	遺傳學概論
松本亦太郎著	室伏高信著	堀江歸一著	堀江歸一著	堀江歸一著	堀江歸一著	堀江歸一著	堀江歸一著	山口正太郎著	高田馬著	野村兼太郎著	猪谷善一著	マーション原著	福田徳三著	吉田英雄著	野村兼太郎著	室伏高信著	竹内義雄著	長尾正人著	
三五〇	一〇〇	四〇〇	三〇〇	四〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一五〇	二八〇	三〇〇	二五〇	二五〇	一〇〇	八〇〇	四五〇	一〇〇	三五〇	一八〇	
二四	二六	二七	二七	二六	二六	二六	二六	二〇	二四	二四	二六	二四	二六	二八	二七	二四	二八	二〇	



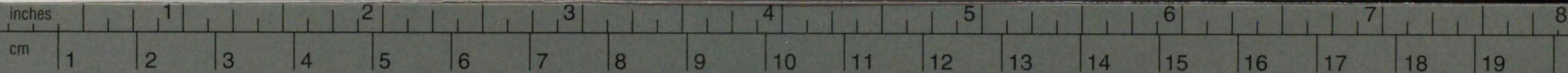


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

